市内依存症回復施設等における依存症支援の実態に関するヒアリング結果

1　実施概要

主としてアルコール・薬物・ギャンブルなどの依存症の問題を抱える当事者の相談を受けている市内依存症回復施設等（市内に事務局がある団体。電話相談事業のみは除く）16 カ所を対象に、依存症相談の実態を把握するために口頭でのヒアリングを実施しました。

(1)　実施期間

令和元年 11 月～令和２年３月

(2)　対象機関

市内依存症回復施設等 16 か所

(3)　ヒアリング内容

ア　依存症相談の実態
イ　支援の実態と課題
ウ　他機関への活動の周知・連携状況

(4)　ヒアリング実施者

横浜市こころの健康相談センター職員

2　ヒアリング結果

(1)　依存症相談の実態について

市内の依存症回復施設等における支援の対象分野は、アルコール・薬物・ギャンブル等などとされており、依存対象を特化した施設、複数の依存対象に対応した施設等がありました。アルコール・薬物・ギャンブル等など以外には、ゲーム・インターネット、買い物、恋愛、性、クレプトマニア、共依存、AC、摂食障害に対応している施設がありました。

回復施設の所在地は、東部や相鉄線沿線に集中していました。利用者の性別については、男性のみ、女性のみ、男女どちらも受け入れているところがありました。男女どちらも受け入れている施設について、利用者の多くは男性でした。

利用に繋がるまでの相談手段は、主に電話相談、来所相談でした。矯正施設への訪問相談を実施している施設は半数以上ありました。メールや LINE での相談を行っている施設もありました。

約半数の施設等で、電話又は面接による家族相談が行われていました。また、家族向けサロン、勉強会・セミナーを行っている施設は全体の約３分の１でした。家族相談を行っていない施設、家族相談を行っていないが、独立した家族会と提携している施設もありました。

大多数の施設では、当事者とそうでない人が両方、スタッフとして勤務していました。当事者スタッフがいない施設は１か所でした。当事者スタッフのいる施設においては、当事者スタッフは主にその施設の卒業生でした。

(2)　支援の実態

施設等で実施しているプログラムは、１日に１回から３回のミーティング、認知行動療法のほか、レクリエーション（調理、体操、手芸等）、軽作業、ボランティア活動などがあり、施設によりその組合せは様々でした。また、一部ではグループセラピーや個人カウンセリングを日常的に行っているところもありました。

通所型支援については、障害者総合支援法上の障害福祉サービス（以下、「障福サービス」という。）を適用している施設、横浜市単独事業の地域活動支援センター精神障害者作業所型を適用している施設、独自財源で運営している施設の３つの形態がありました。障福サービスでは、主に自立訓練（生活訓練）を適用していました。通所頻度としては、毎日通所を原則とする施設、週末のみの通所も受入れている施設、入所施設を併設している施設など様々でした。

入所型支援については、障福サービスの共同生活援助を適用している施設、独自財源で運営している施設の２つの形態があり、独自財源で運営している施設のほうが多いことがわかりました。入所型支援は、住まいとしての側面があり、入所者の日中の活動場所である市外・県外の施設と提携している施設がありました。また、利用者が自身の状況に合った施設に入所できるよう施設間で連携している場合もありました。

施設利用者の中には、生活全般の支援を必要とする人や特定の生活課題の解消が必要な人がおり、施設内のプログラム提供や入所型支援以外に次のような支援を実施していました。

居住支援については、アパート設定のために不動産業者へ同行したり、入居のための準備支援を行ったりしている施設がありました。また、サテライト施設としてアパートを団体として借り、入居者が単身生活をするにあたり、そのまま本人名義に変更することを行っている施設がありました。

生活支援としては、主に金銭管理、債務整理手続同行、通院同行、通所送迎を行っている施設がありました。

就労支援については、就労支援プログラムのほか、通所施設を利用しながら半日のアルバイトを経験してもらう等の対応がありました。このほか、他の障福サービス事業所（就労継続 B 型等）に移行するなどの支援がありました。就労中の利用者が多い施設の場合は、通所できなくても個別相談に応じるなどの対応を行っている施設がありました。

いずれの支援においても SNS を活用した日常的なサポートを行っている施設がありました。

(3)　支援の課題

回復施設等を利用している方の中には、発達障害・知的障害・精神疾患など重複する障害がある対象者が多いこと、幼少期の問題・トラウマ（性虐待・生育過程の影響等）が認められる人がいること、複数の依存症を併せ持つクロスアディクションの人が多いこと、身体機能面での障害により送迎が必要だったり認知障害があったり医療的ケアを必要とする高齢者がいること等による、医療との連携や多様で幅広い支援が課題として挙げられました。

一方で、障福サービスの利用までは必要ないが、債務整理などの特定の生活課題の解消により回復を続けている人たちの存在もあり、回復施設の利用だけが唯一の回復の手立てでないこともあげられました。また、近年はいわゆるインターネット依存・ゲーム障害に関する、小中高生とその保護者からの相談が増加しているが、紹介先に苦慮しているとの声もあり、未成年者に関する相談を受けても、通所・入所の受け皿がないことが課題であることがわかりました。

各施設からは、依存症者像が多様化し、それぞれが抱える生活課題の違いやライフスタイルの変化により、これまでのミーティングを中心としたプログラムだけでは、利用者の回復支援につなげられないといった戸惑いも聞かれました。例えば、毎日通所できない利用者に配慮して、週末のみの通所を設定したり、本来求めている自助グループへの参加を見送ったりする等の調整を行っているものの、通所よりは入所支援のほうが回復率は高い印象があるという声も聞かれました。また、条件が厳しいと通所に繋がらないとの理由から、ミーティングや勉強会の参加が困難な利用者に対しては、日中活動中心のプログラムを組むなどの工夫を行っているところもありました。女性特有の問題の場合、例えば性的な事柄やストーカー被害等の話は男性の前ではしづらいという声が聞かれており、そういった場面、環境への配慮の必要性についてもあらためて確認されました。

ミーティング以外の活動プログラム、生活支援、就労支援、居住支援など各施設における取組は様々であり、利用者の特性やニーズに則して対応しようとして発展してきたものでした。しかしながら、これらの支援の課題として、時間的制約やマンパワー不足からくる負担感も聞かれました。

家族支援では、電話又は面接による相談は行われているものの、訪問を行う施設等は少なく、また、家族が早急に結果を求めてしまうことや助言しても対応がなされないまま時間を要すること、結果として当事者の施設利用に繋がらないことへの負担感があることがあげられました。

現在の障福サービス等が依存症の回復支援とマッチしていないという意見も聞かれました。例えば、障福サービスは支給量・期間が限定されており 365 日通所する依存症支援の概念と、相容れないという声がありました。また、自立訓練の場合、利用期間は原則２年となっており（１年延長することも可能だが審査が必要)、回復過程としては短く、そのため依存症の回復施設ではない他の施設につなげているが、その後回復し続けているかフォローアップができないという声が聞かれています。入所施設についても自主運営が多いのは、県内外の回復施設からの急を要する利用希望に対し、区分認定や支給決定を受けなければならない障福サービスでは即応することができないことが影響していると、かねてから指摘されています。

このように、回復施設は、利用者ニーズを汲み取り、プログラムの内容に変化をもたせているものの、依存症回復の過程と障福サービスの制度がなじまない状況や、利用者ニーズに細かく対応する負担感もあり、依存症の回復支援を満足に行えないというジレンマを抱えながら試行錯誤していることがわかりました。

この他に、利用者人数の減少や運営上の課題についての声も聞かれました。例えば、女性に特化した回復施設の場合、回復者である女性スタッフは出産・育児等により継続的に支援に関わることが難しく、スタッフの確保が困難であることがあげられました。一部の施設では、事業所を開所したもののスタッフ不足のため閉鎖したところもありました。

また、法人内で新たな事業所の設立や他施設へのアウトリーチを新規事業として検討しても、それに対応できる人材がなかなか見つからず、展開ができないという声もありました。そして相談に対応するスタッフのセルフケアや相談援助技術向上の機会、事業の継続及び展開を踏まえた団体への支援について求める声もありました。

さらに、DV やストーカーの加害者が来所する等のトラブルもあり施設の危機管理の課題も聞かれました。

今回のヒアリングでは、内科や一般精神科からの回復施設への紹介例はほとんど聞かれてい

ません。支援を展開する過程で出会う弁護士や司法書士の中には、ギャンブル等の問題、回復支援に理解のない場合があるとの声がありました。福祉分野においても、依存症者に対応した計画相談支援を行っている事業所は大変少なく、地域の支援者も回復施設等の活動を知らない状況が伺えました。

(4) 活動の周知・連携状況

開所当時に地域で反発があっても、普及啓発や地元の活動への参加を続けることで地域に溶け込むことができた施設もありました。

施設間の連携事例としては、相談者のニーズが自らの施設の特色に合わない場合、相談者が回復につながるような他の施設等を紹介するといった声も聞かれています。また、横浜市精神障害者地域生活支援連合会（横浜市精連）の活動やリカバリーパレードのほか、各施設が個々に他の回復施設と勉強会・行事を開催したりする活動を続けています。なかには、事業者と勉強会を行う施設もありました。しかし、その連携の範囲は各施設の判断のもとに進められており、すべての回復施設が集まる機会はこれまでありませんでした。

3 まとめ

本市の依存症者についての相談及び支援に関する課題は多岐にわたっており、それぞれのニーズに対応する受け皿が求められています。

回復施設はそもそも「依存症の回復」を目指すという共通の目的がありますが、各施設が対象としている依存症者のニーズとそれに対応する活動内容はそれぞれ異なります。

それぞれの回復施設等が相対する相談者に対しアセスメントをした場合に、多様な依存症者のニーズが自らの施設の特色に必ずしも合うとは限りません。この場合、回復につながるような他の施設等を紹介するといった声がきかれている現状からも、このことは相談の際のアセスメントの重要性とともに、回復施設等がお互いの活動内容を知ることの重要性も示しています。

背景に依存症の問題がある人が対象となりうる、債務整理などの特定の生活課題に関する相談窓口に対しては、支援が円滑に進められるために、依存症についての正しい理解を進める普及啓発活動などを行っていく必要性があげられます。

また、回復施設の利用だけによらず回復への道を歩み始める人たちもいることから、専門医療機関や回復施設等へつながっていてもいなくても、横浜市内の回復施設等の社会資源を知る機会を広げていくことは重要と考えられます。何らかの理由で回復施設をいったん退所したり、利用に繋がらなかったとしても、その後、当該施設の再度利用を始めたり、入院等を経て他の回復施設にて利用を始めたり、回復施設の利用に至らずとも相談機関の利用や生活課題の解決を通じて回復を続けたりしている人の存在など、多様な回復のあり方を認め合えるような風土の醸成が求められます。このため、支援者等への各民間団体の広報活動や研修会等、団体・支援者間の連携の場を支援していくことが必要と考えられます。その際には、医療機関や地域の相談窓口となる機関、それぞれとの連携の場のほか、各回復施設等がもつ特色のある活動を紹介する場なども創設することが必要です。

さらに、直接支援にあたる回復施設等の支援者にとっては顔の見える関係のもと、施設のスタッフとしての悩みや課題を共有し、情報共有やセルフケアの機会、研修等への反映を行う場やその蓄積が必要と考えられます。

各施設　ヒアリング結果

ヒアリング協力施設等（法人・団体名の 50 音順）
　特定非営利活動法人　RDP
　特定非営利活動法人　あんだんて
　特定非営利活動法人　ギャンブル依存ファミリーセンター　ホープヒル
　特定非営利活動法人　市民の会　寿アルク
　特定非営利活動法人　ステラポラリス
　特定非営利活動法人　ダルクウィリングハウス
　特定非営利活動法人　日本ダルク神奈川
　特定非営利活動法人　ヌジュミ
　特定非営利活動法人　ＢＢ
　一般社団法人　ブルースター横浜
　特定非営利活動法人　横浜ダルク・ケア・センター
　横浜断酒新生会
　特定非営利活動法人　横浜マック
　株式会社　わくわくワーク大石
　特定非営利活動法人　ワンデーポート
　一般財団法人　ワンネスグループ　横浜オフィス

【注意事項】
　令和元年度のヒアリング時点での状況を記載しています。現在の活動状況と異なる場合がありますので、ご了承ください。
　ご利用等については、各施設にお問合せください。

特定非営利活動法人 RDP

利用者･対象者/対応の特徴

【利用者・対象者】

利用者は 40 代男性が中心です。アルコール、薬物、ギャンブル、摂食障害、買い物・借金、強迫的な性行動、どの依存対象者も利用可能です。多くが医療機関からの紹介です。毎日の通所を求めますので、利用者は基本的に無職もしくは休職中です。送迎はなく、各自公共交通機関等を利用して通所します。

【対応の特徴】

自立訓練（生活訓練）事業所として「ＲＤＰ横浜」を開設しています。このほか、横浜市内で４つの男性用ナイトハウスを自主運営しています。指導員は回復者です。

２年間通所した後は一般就労、就労移行支援に移行しますが、施設利用修了後、就労・生活についての支援を他の機関とも連携して行っています。

医療機関が当施設で実施する座学中心のプログラムが合いそうな人を紹介してくれています。医療機関でメッセージを送る活動をしています。

保護観察所プログラムに職員が参加したり、横浜市精神障害者地域生活支援連合会経由で看護学生や病院の研修生の受け入れ等を行っています。

リカバリーパレードに参加しています。

目指しているもの

不治、進行性の病気であるアルコール、薬物、ギャンブルなどの依存症からの回復を支援し、一人でも多くの人を救うために 1940 年代のＡＡ（アルコール依存症当事者の自助グループ）が達成していた 75%以上の回復率を目指しています。発達・知的・精神障害などを併せ持つ人は多い印象ですが、依存症の回復を中心に考えています。

今後は、計画相談、就労支援等のほか、広報活動、統計事業等に力を入れたいと考えています。

運営にあたっての課題

「ＲＤＰ横浜」では、自助グループ（ＡＡ、ＮＡ、ＧＡなど）のミーティングに通っていただき、共同体感覚を身につけて頂くよう促しています。

女性が見学に来ても利用者が少ないためか利用に至りません。家族からの相談に対し、対応に限界があり、また、時間がとられています。

計画相談で依存症の人に対応してくれるところが少なく、困っています。

特定非営利活動法人　あんだんて

利用者･対象者/対応の特徴

【利用者・対象者】

利用者は女性のみです。アルコール、薬物が主だが、摂食障害との重複や統合失調症等他の精神疾患をもつ利用者や幼少期の問題を抱えている人も多いです。

【対応の特徴】

地域活動支援センター「Indah（インダー）」を、３６５日開所しています。ミーティングのほか、畑作業などのプログラム、年間行事（クリスマス会など）を行っています。ミーティングに出なくても、個人的に対応している人もいます。ママミーティングでは、子連れでも参加できます。言いっぱなし、聞きっぱなしのミーティングを開催しています。自助グループへの参加は利用者との相談の上、勧めています。女性対象の回復施設と合同行事を実施しています。季節を感じるイベントなど、ミーティングではないところでの本音が大切と考えています。

医療機関からの紹介のほか、インターネットで知って相談してくる方が多いです。また、地元警察や更生女性会など、ストーカー被害や触法女性のフォローに関しての連携を行っています。女性職員向けのネットワークに参加しています。

地域の方々にも活動を理解してもらえるよう、地元の祭りにも参加しています。

目指しているもの

依存症は回復できる病気です。病気にかかってしまったことは変えられませんが、人間性の回復は可能です。

「Indah」は依存症（アルコール、薬物、摂食障害、その他・・・）の問題を抱えた女性のための居場所です。安らぎと安心の場として、相談や情報交換、グループワークによって、依存症の症状を止めることだけでなく、生活を取り戻し、地域で豊かに暮らせるようになるよう、ゆっくりと回復のお手伝いをしていきます。

運営にあたっての課題

女性施設であるため、所在や活動等をオープンにする難しさがあります。危機管理は課題です。また、女性スタッフに限定しているため、人員の確保が課題です。ナイトケアを中止しましたが、スタッフがいればナイトケアを行いたいと考えています。

また、女性依存症者の支援の課題としては、女性特有の悩みやつらさを話せる場が少ないと感じています。例えばＳＡは圧倒的に男性が多いです。

福祉的就労が望ましい場合でも、就労継続支援Ｂ型では、生活維持に必要な賃金に足りないため、一般就労し、結果としてＡＡを休んでしまい、回復に至らないことがあります。

特定非営利活動法人　ギャンブル依存ファミリーセンター　ホープヒル

利用者・対象者/対応の特徴

【利用者・対象者】

疾患は主にギャンブル依存症です。入所者は就労中です。休職して入寮しに来る人もいます。生活保護受給者は利用対象外です。これまで支援してきたなかでは、ＧＡや回復施設に継続的に繋がらなかった人でも、なんとかギャンブルをコントロールしながら生活している層もいることを感じています。

【対応の特徴】

日本ではじめてギャンブル依存症に苦しんでいる家族を支援する「ファミリーセンターホープヒル」を開設、入寮施設「ハウスホープヒル」と共に自主運営しています。グループセラピーやアディクションの専門家による心理療法、特に認知行動療法を駆使して、ＡＡの 12 ステップの生き方を中心に、ギャンブル依存症の回復に必要な基礎知識を身につけます。また、個別相談、それぞれに応じたプログラムを作成します。「ハウスホープヒル」では、アパート・マンションを借り上げ、当番制で食事を作る等の共同生活をしています。

女性の相談、薬物相談は他の回復施設へ繋いでいます。

弁護士、司法書士を紹介する場合もあります。裁判に出廷したり、意見書を書くことも多いので、弁護士との協働は多いです。

目指しているもの

「自分で何とかする」と思っている間は回復しません。一番効果があるのは、同じギャンブルを止めたいという仲間に会い、物の見方、考え方、生き方を変えていくことです。回復施設は生き方の基礎を身につける学校のようなもので、新しい家を建てる時の設計図を学び土台を作る役割をします。施設を卒業した人の回復率は非常に高いです。家族支援の充実を目指し、家族自身が依存症に関する知識について学ぶことを重視しています。

運営にあたっての課題

区役所との連携事例はほとんどありません。援助者のためのセミナー（経験して勉強する必要性、グループセラピーの進め方）などが大切と感じています。弁護士や司法書士でギャンブルの問題に理解のない人も多いため、啓発を希望します。ネット・ゲーム等での学校への啓発活動も必要だと考えています。

家族支援が大切と考えていますが、相談者が減り経営が厳しいのが現状です。市外での活動も行っていますが、横浜市の補助金制度は市外だと活用できないことが厳しいです。

特定非営利活動法人　市民の会　寿アルク

利用者･対象者/対応の特徴

【利用者・対象者】

アルコールのほか、ギャンブル依存症の方の受け入れを行っています。利用者のなかに、知的・精神疾患の重複障害のある方のほか、高齢者が増加しています。

【対応の特徴】

就労継続Ｂ型事業所「アルク翁」、自立訓練（生活訓練）事業所「第２アルク生活訓練センター」、地域活動支援センター「第１アルクデイケアセンター松影」「第２アルク地域活動支援センター」「アルクハマポート作業所」のほか、グループホーム「本牧荘」、指定特定相談支援事業所「ぷらんアルク」、相談室「ヒューマンサポートセンター」を設置・運営しています。回復に合わせてプログラムを組み、３６５日年中無休です。アルコール依存症からの回復者本人が指導員となり、アルコール（薬やギャンブルなど）を止めたい願望のある方を受け入れています。金銭管理は任意契約で行い、就労支援、アパート設定や入居の準備支援を行っています。

プログラムの一環として区内の地域行事等へ参加しています。

目指しているもの

アルコール、ギャンブルなどの依存症からの回復を目指しています。 依存症の回復には”仲間”と”プログラム”が必要です。寿アルクは”仲間”を大切にしながら、今日一日のプログラムを実践しています。「依存症から回復したい」との希望をもって、寿アルクに繋がってこられた方々と一緒に、これからどのように生きていくのかについて一緒に考えていきます。

運営にあたっての課題

未だ治療につながっていない依存症者に回復の方法と回復の場があることを知らせることです。

３ミーティングを基本として、生活の基本的支援（金銭・服薬管理、受診・買い物同行）のほか、緊急対応、通院同行などの支援も必要になっています。

障害者総合支援法では通所サービス支給量や期間等の制限があるため、寿アルクの「365日通所」の方針との相違が生じたり、更生施設入所者は障害福祉サービスが使えないほか高齢化や介護的支援のニーズを伴う利用者も増えてきた中で、社会資源利用の制限や看取りのニーズといった課題も抱えています。

今後、ギャンブル依存症者への回復支援を充実させるために、ギャンブル専門の職員の配置も必要となっています。

特定非営利活動法人　ステラポラリス

利用者･対象者/対応の特徴

【利用者・対象者】

依存症の方だけでなく、さまざまな障害（発達障害、統合失調症、気分障害、軽度知的障害など）の方が利用しています。依存症はギャンブルの方が多いですが、ネット（ゲーム）依存やアルコール関連障害にも対応しています。依存症の課題がない方の利用も増えており、三分の一程度は依存症以外の精神疾患の方が利用しています。ご本人、ご家族からの相談の他、関係機関からの紹介が多いです。ひきこもりの相談にも対応しています。

【対応の特徴】

病名や障害名にとらわれず、特性や傾向、困りごとを踏まえて個別に対応しています。利用期限を終えて退所した人がスリップをして、また通所することもあります。スリップ＝終わりではなく、スリップ＝失敗と捉え、失敗を人間的な成長のチャンスと捉えて支援を実施しています。自立訓練のプログラムとして「ステラ生き方研究室」（当事者研究）や社会生活力プログラムを実施しています。自分の普段抱えている苦労を共に分かち合い、その対応を皆で考えていく場です。また、社会生活の上で必要な知識や技術を学び、健全なお金の使い方等を身につけるために個別の対応も実施しています。

目指しているもの

当法人の理念は「地域共生社会の創出」と「ピアサポートの実践」です。

就労＝自立ではなく、その人らしい生活を送ること＝自立と考えています。知的障害者や精神障害者に対して、自立した日常生活や社会生活を送ることができるように支援します。依存症の回復だけが目標ではありません。

障害福祉サービス事業として横浜市で自立訓練（生活訓練）、大和市で共同生活援助の事業を運営しています。さまざまな地域の社会資源と連携し、ピアスタッフの専門性の向上に取り組んでいます。スタッフの公的資格（国家資格）の取得は、支援の質の向上のためにも必要になると考えています。現在社会福祉士 3 名、精神保健福祉士 2 名（重複有）。

運営にあたっての課題

依存症やさまざまな障害からの回復には長い時間が掛かります。しかし、生活訓練の事業としての利用期限が 2 年と限られており、限られた時間の中でどこまで支援できるかが大きな課題と感じています。また、当事者本人だけではなく、家族に対する支援も必要なことが多くありますが、家族の考え方もさまざまで、よりよい支援を提供するのが難しいことが多いと感じています。

特定非営利活動法人　ダルクウィリングハウス

利用者･対象者/対応の特徴

【利用者・対象者】
　薬物依存症のほか、買い物依存症など様々な精神疾患の方の受け入れを行っています。
【対応の特徴】
　入寮機能のほか、緊急宿泊施設を自主運営しています。住所非公表です。
　入寮者は、日中は都内にある自立訓練事業所に通所しています。中区を中心に地域活動等を実施しています。
　施設長は 24 時間対応です。相談・訪問もいつでも可能です。
　行政の窓口から、無料低額宿泊施設を退所となり行き場のない事例について対応してほしい、という相談もあります。連絡をもらい、窓口に出向き、いったん緊急避難で連れてくることがあります。宿泊させながら、次にどうするか、他の施設を利用するかどうか等を一緒に考えます。緊急対応時は連携先の精神科医療機関に相談し、即日対応してもらうことがあります。
　区職員や地域の援助職を対象に依頼に応じて研修や講演を実施しています。保護観察所や刑務所教育にも出向いています。

目指しているもの

　回復施設を退所した人たちが薬物の再使用、中にはその結果亡くなる人もいて、課題に感じていました。
　環境調整をはかるにあたり、ネットワークで対応をはかることを重視しています。特に、行き場のない「緊急対応」については、支援として力を入れていきたいと考えています。

運営にあたっての課題

　施設の所在については、他の地域では住民の反対運動があった例も聞いており、今後も非公表とする方針です。

特定非営利活動法人　日本ダルク神奈川

利用者･対象者/対応の特徴

【利用者・対象者】

薬物依存症のほか、アルコール、ギャンブル、買い物、性依存、クレプトマニア、さまざまな精神疾患の人たちを受け入れています。

遠方からの相談が多いです。スルガダルク・浜松ダルクとの連携体制であり、横浜市外出身者が主です。

【対応の特徴】

ミーティングを行うほか、入寮施設を自主運営しています。

当施設には、スルガダルク・浜松ダルクで回復が進んだ人（単独でミーティングに通える等）がステップアップとして移ってきています。金銭管理・身体疾患の管理が必要な場合は、スルガダルク・浜松ダルクで対応します。法人内のシステムで基本的には対応しています。

入寮期限は設けていません。ミーティングは通所でも受入れており、スポット利用可能です。緊急対応時は連携先の精神科医療機関に相談、即日対応してもらっています。施設利用者について、再使用、ＯＤ（大量摂取）による死亡事例はありません。

横浜刑務所や横須賀刑務支所にも出向き、長年、薬物依存の離脱指導を通じて更生支援を行っています。

目指しているもの

主に 12 ステッププログラムを使ったミーティング(グループセラピー)をダルク又は自助グループへの参加により、1 日に 2 回行っています。その他、生活の訓練や仲間との対人関係を育み、スポーツ、温泉、DVD などのレクリエーション、ボランティアなどを行うことで、“今日一日、薬物を使わないで生きる”ことを実践します。毎日続けることによって、薬を使わないクリーンな生き方をし、成長していくことが回復となります。最終的には自助グループに繋いでいくことを援助することを目標としています。

運営にあたっての課題

大事なのはクスリをやめて、ダルクを出た後。ＮＡとは一生の付き合いになり、ＮＡで回復と成長をしていく。そうした、ＮＡとダルクの役割の違いがわからなくなってきている場面があるのではないか、と感じることがあります。

スタッフが自分のケアができなくなっている、と感じることがあります。

施設に夜間、電話がかかってきて、スタッフはボランティアで話を聞くことがあります。仕事として話を聞くことができる依存症ホットラインのようなものがあればよいと思うことがあります。

特定非営利活動法人ヌジュミ

利用者･対象者/対応の特徴

【利用者・対象者】

20 代以上の女性で、ギャンブルのほか、アルコール依存症の利用者がいます。ゲーム依存・ゲーム課金、買い物依存に関する相談も受けています。

【対応の特徴】

地域活動支援センター「デイケアぬじゅみ」を運営しています。全国でも数少ない女性向けのギャンブル依存症回復施設のため、全国から問合せ、通所希望があります。家族相談窓口があり、家族や知人がインターネットで検索し、本人を連れてくることが多いです。

３ミーティングと 12 ステッププログラムが中心です。ミーティングは子連れでの参加ができます。

見学・訪問は女性職員に限定しています。買い物依存などで金銭管理ができない方の来所もあり、状況により個別の対応をすることがあります。

OG は 20 名以上になり、施設に来て司会を行うこともあります。回復している姿を利用者に見せる意義は大きいと考えています。

女性職員向けのネットワークに参加しています。

弁護士・司法書士との連携のほか、精神科医療機関と連携しています。

目指しているもの

ギャンブル依存症などからの回復には同じ病気から回復した、また回復したいと願っている仲間との出会いが必要です。ルールを順守できない場合でも罰則はありません。正直に言い合える関係構築を目指しています。

性的なこと、ここでしか話せないことを共有します。女性依存症者は、精神疾患や生計のための風俗や援助交際など様々な問題を抱えていることが多いです。自助グループに繋げることにも力を入れています。

運営にあたっての課題

３ミーティングの体制を崩したくないですが、育児中・就労中の参加者も多く、参加者のライフスタイルに合わなくなってきました。土曜日のみの参加や、夜の自助グループ欠席などルールを緩めていますが、一方で、スリップしやすくなるのが課題です。

もう少し利用人数を増やしたいです。自立訓練（生活訓練）事業所としたいですが、体制上難しいです。女性の回復者が少ないうえ、女性の回復者は出産や育休などがあり、スタッフとして継続的に関わることに難しさがあります。

研修では、新任スタッフが他回復施設のスタッフの取組について話を聴くのは有用だと思います。

特定非営利活動法人　BB

利用者･対象者/対応の特徴

【利用者・対象者】

アルコール・ギャンブル依存の 50～60 代が中心ですが、幅広い年代の方が利用しています。知的、発達障害、精神疾患などの重複障害の人にも対応しています。生活保護受給者も受け入れています。日中の活動場所や居場所として利用する人もいます。

【対応の特徴】

地域活動支援センターです。週間プログラムや野外活動、ハウスミーティング（施設内の取組や改善点について話し合う）を行っており、個別支援（目標を設定し、支援計画づくりのお手伝い）で対応しています。

医療機関経由で、治療を受けた人を受け入れています。他施設に通所していた人を受け入れる場合もあります。単身の生活保護受給者は、区の担当ＣＷと安否確認を含め、連携をとりつつすすめていきます。

目指しているもの

”リラックス”をテーマに、ゆったりと楽しく回復を目指しています。重複障害のある方など 3 ミーティングに乗り切れない人も、通所してリラックスを感じてほしいです。少人数の施設であるため、細やかな個別の対応が可能です。落ち着いた環境で、自分自身の生き方を見つめなおします。

運営にあたっての課題

区役所生活支援課や医療機関などと連携を図り、お互いに情報共有をすることでよりよい支援ができると考えています。

一般社団法人　ブルースター横浜

利用者･対象者/対応の特徴

【利用者・対象者】
　ギャンブル等依存症を中心としたインターネット・携帯・ゲームなどのプロセス依存症の男性のみを対象としています。利用者は主に 20 代・30 代です。
【対応の特徴】
　入寮施設を運営しています。土日は休みにし、過ごし方の計画をスタッフと考えています。ミーティングが合わない人もいることを前提にプログラムを作成しています。自助グループの利用も勧めています。
　利用者には必ず医療機関の依存症外来に通ってもらい、感情に関するプログラムを受けてもらっています。男性のみのギャンブル等依存症者としているため、それ以外の相談の場合は、他施設を紹介しています。また、自宅が入寮施設と近い場合は、環境を変えるため、遠方の施設を紹介しています。
　横浜市南部を拠点に活動する数少ない施設として自助グループを仲間と協力して増やしており、今では横浜市南部でも平日毎日近くで行われるようになってきました。抱えきれない感情については、他人と繋がることで対処することが必要であり、自助グループを大事にしたいと考えています。
　医療機関や保護司会、他の回復施設、弁護士、司法書士、税理士事務所等の繋がりがあります。

目指しているもの

　プロセス依存症になるまでのめりこむ原因にはさまざまな要因がありますが、そこには「生きづらさ」が大きく関係しているのではないかと思います。プロセス依存症からの脱却を継続するためには、その人にあった方向性を示すことが大切であるため、施設はいろいろあって良いと考えています。それぞれの方のペースにあわせて、プログラムを組み合わせながら回復のステージをあがっていき自立を約２年で促していきます。

運営にあたっての課題

　家族からの相談はギャンブルはもとより携帯、ゲームが多く、相談者が結果を求めすぎる傾向がある気がしております。当施設は開所してから日が浅く、まだ入所者が少ない為、運営は厳しい状況です。しかしながら体制はスタッフをそろえており、全てのスタッフが心理カウンセラーの資格を取得しました。夕方から夜にかけての相談や、夜中の突然の相談が有りますが、想定内と考えているため対応しています。

特定非営利活動法人　横浜ダルク･ケア･センター

利用者･対象者/対応の特徴

【利用者・対象者】

ここ数年は男性利用者のみです。未成年者からの相談はありますが、利用者はいません。薬物は合法・違法を問いません。全体の３～４割が医療機関の紹介です。精神疾患のある利用者が増えています。

【対応の特徴】

自立訓練（生活訓練）事業所のほか、入寮施設を自主運営しています。困難事例については、専門家を交えたプログラムを組んでいます。入寮を勧奨し、県内外ダルクを紹介しています。精神疾患等により、ミーティングの参加が難しい場合は個別の声掛けや個人のペースに合わせた参加のサポートを実施しています。プログラム修了後・退所後の個別相談の体制を整えています。

保護観察所や医療機関の回復プログラムにファシリテーターとして定期的に参加しています。中学生へのメッセージの依頼を受けたり、市大看護学生実習を受入れています。

新職員は久里浜医療センターでの研修のほか、各ダルクでの約３か月間の研修を行っています。イベント開催時の周知は、「ひまわり家族会」が担っています。

動機が不十分でも、少しずつ変わってくる人がいます。いったん「自分でやれる」と退所しても、あらためて出直す人もいます。ダルクに通いはしなくても、個人的につながりを続けていたり、ダルクにふっと現れる人、レクリエーションのみに参加する人はいます。再相談は受け入れています。

目指しているもの

ダルクでは、自分ではどうすることもできなくて今苦しんでいる薬物依存者やその家族の人たちに、薬物依存は回復できる病気であり、薬物依存から回復しようとしている多くの仲間がいるというメッセージを送っています。ダルクは薬に代わる心の癒しを与える場所と思っています。私たちは、薬を使う中でさまざまなものや人々を傷つけて破壊してきました。行動は薬物をやめることで、取り戻していけます。もう一度、新しく関係や立場を修復（リハビリ）していくことで生き方が変わると考えています。

運営にあたっての課題

精神疾患のある利用者が顕在化し、ミーティングの参加が難しいです。職員はバーンアウトになりやすいです。精神医学一般知識の習得や事例報告等の場があれば参加したいと考えています。

横浜断酒新生会

利用者･対象者/対応の特徴

【利用者・対象者】

就労者が多いです。女性の社会進出や高齢者の増加などの社会的な背景により、近年、アルコール依存症の患者層も多様化しており、若い女性や主婦層のアルコール依存症患者も増加しています。また、定年・退職をきっかけにアルコール依存症になるサラリーマンも増えています。50 代～60 代が多いです。

【対応の特徴】

施設運営はしていません。酒害相談員研修は県からの委託事業です。断酒会が主催するのは全国的にも珍しいです。

１回の例会に 15 人程度が参加します。８割は家族からの相談ですが、女性の相談の場合は本人からが多いです。

酒害相談のあと、定例会へ繋げます。女性については、アメシスト例会を限定で行っています。酒害相談員が、定例会への動向相談、歓迎の雰囲気づくりを行っています。神奈川県酒害相談員地区別一般研修会への高齢・障害支援課職員の参加があります。

年１回の本研修以外にも、年間 20 回地区別研修会を実施し、酒害相談員の依存症における基礎知識・相談技術向上に努めています。

目指しているもの

全日本断酒連盟は、お酒で悩んでいる本人とその家族をはじめ周囲の方々の相談に応じ、本人が飲酒の害から回復し、酒のない新しい生活を始めることで、社会の信頼を回復できるよう支援する団体です。アルコール依存症は、進行性の脳の慢性疾患とされ、一時的な断酒治療には成功しても自助グループに参加するなど継続的な回復への努力が必要です。まずは酒害相談を受けてほしいです。

運営にあたっての課題

緊急性の度合いを判断するのが難しいです。

また、内科、一般精神科からのつながりがありません。ＳＢＩＲＴＳの目的においても、早期発見・早期治療の観点で、内科や一般精神科から依存症専門外来に速やかにつながるといった必要な医療の提供を実現してほしいと考えています。

特定非営利活動法人　横浜マック

利用者・対象者/対応の特徴

【利用者・対象者】

ほとんど依存症専門外来のある医療機関からの紹介です。医療以外の支援が必要になるような、知的障害や発達障害、その他の精神疾患を重複しているような方の紹介を受けています。

【対応の特徴】

生活訓練事業所「横浜マック　デイケアセンター」のほか、グループホーム「いしずえ」（男性）、「まゆの家」（女性）を運営しています。ミーティングが合わない利用者には個別のプランニングを行い、週１回程度職員との面接を実施しています。施設利用者を対象に、計画相談作成を開始しました。地域の自助グループへの参加も勧めています。

ひきこもりに対応する専門相談員を配置しています。また、社会福祉士やＰＳＷを各１名配置しています。区内の基幹相談支援センターとの会議や様々な研修に出ることにより、依存症のみならず他分野のサービス事業者との関係を作り上げています。職員は、他施設や区が開催する研修（知的、発達障害関係）に参加するほか、外部のスーパービジョンを受けています。

区内の全地域ケアプラザへ施設紹介を行うなど、地元の横の連携を心がけています。

目指しているもの

横浜マックでは多種多様の利用者が混在しているため、横浜マック単独での回復は困難なケースが多々あります。そのため、関係機関との連携が重要であると考えています。依存症の回復支援が断酒～社会復帰までの一連のサービスを指すのであれば、それを一貫して継続的に支援することが使命だと考えています。

運営にあたっての課題

最初の２年間は断酒で精一杯です。以前の利用者は４～５年通所していました。生活訓練２年ではおさまりきらず、飲まないで自助グループ定着をはかるか、他のサービスにつなげることが目的となっています。卒業先で再飲酒があればフォローアップができればよいのですが、その体制にありません。

専門医療機関からの紹介はアセスメントが十分になされており、スムーズにプログラムに参加できています。一般精神科や内科からの紹介については課題を感じています。

株式会社　わくわくワーク大石

利用者・対象者/対応の特徴

【利用者・対象者】

概ね母体の「大石クリニック」の患者様ですが、一部、他の医療機関の患者様も受け入れています。男性・女性どちらの利用もあり、アルコール、ギャンブル、薬物、ネット、性嗜好障害、クレプトマニア、買い物と多岐にわたります。アルコールについては、大石クリニックの減酒プログラムの影響からか、ご本人からの相談が多いです。アルコールの場合、60～70 代の相談があります。ネット依存の場合、本人はもちろん家族が困って相談に来られる状況で、大石クリニックで対応しています。また、区の生活保護担当者や MSW からの相談があります。クリニックの初診時に簡易検査を行って、発達の偏りなどの本人の特性の把握に努めています。

【対応の特徴】

就労移行支援、就労継続支援 B 型として「㈱わくわくワーク大石」を運営しています。「大石クリニック」と連携して治療と就労支援を並行して進められる体制を整えています。就労支援のほか、金銭管理などの生活支援、12 ステップ、認知行動療法、内観療法、条件反射制御法、SST(社会生活技能訓練)、アサーション・トレーニング(コミュニケーション技法の一つ)、WRAP(元気回復行動プラン)、アンガーマネジメント等を取り入れています。

負債整理などの課題がある場合には、「法テラス」等の相談窓口を勧めています。

目指しているもの

利用者にとって充実したサポートができるよう、「大石クリニック」と連携し、治療と就労支援を並行して進められるような体制を組んでいます。

短期間で一般就労をめざします。それまでの間工賃を得ることも可能です。B 型事業所としても県内屈指の工賃実績があります。

運営にあたっての課題

就労意欲の低い人への就労への動機づけが課題と考えています。また、生活を支援していくにあたり、地域の理解が必要と考えています。

特定非営利活動法人　ワンデーポート

利用者・対象者/対応の特徴

【利用者・対象者】

ギャンブルに問題を抱える男性のみを受け入れています。入所のほか、金銭管理対応のみの利用者、そのほかの相談を受けています。ギャンブルだけが原因で行き詰ることは少なく、暮らし、仕事、余暇が不安定な人がギャンブルに触れると問題が乗じると考えています。

【対応の特徴】

個別のニーズに合わせて対応しています。家族面談や対面相談だけで終える方、通所で関わる方など、多様な方法で支援しています。

通所利用者や入所の初期はグループセラピーで、その人がどんな人でどんな支援が必要なのかを知る場を設けています。ワンデーポートでは、生活の安定や人生が充実できれば、ギャンブルの問題は解決すると考え、利用者一人ひとりに助言し、必要な関わりをしています。

通所利用者には、希望により、金銭管理や余暇支援、個別相談などで長期的に関わりを続けます。10 年以上金銭管理を続けて安定する人もいます。途中ギャンブルをやってしまう人もいますが、多くの場合、生活の微調整で立て直しが可能です。長期的に生活が安定していれば、ギャンブルをやるかやらないかは、本人に委ねることもあります。

入所者、通所者には多様な課題があるため、精神科医、弁護士、司法書士、精神保健福祉士、地域の不動産屋の経営者など、チームによる支援を行っています。

ワンデーポートで関わった人の中には、他者からの支援は受けず自立安定する人もいれば、障害者手帳を取得し福祉制度を利用する人もいます。

目指しているもの

ギャンブルに問題がある人の数だけ、解決方法があります。表面的に起きている問題はギャンブルへの”のめり込み”に起因しているようにみえても、その背景は多様であり、個別的な問題を抱えています。「ギャンブル依存症」とひとくくりにできる問題ではありません。

近年、様々な病気や障害が公的支援の対象になっています。人間の問題行動に名前をつけて区分けしていくことで助かる人もいるとは思いますが、「その人」がどんな人かであるかを軽視し、病気の治療や回復プログラムに焦点があてられ、ズレた支援が行われていると感じることがあります。ワンデーポートでは、障害や病気の回復プログラムではなく、その人の人格や人生を第一に考え一人ひとりに寄り添った関わりを心がけています。

運営にあたっての課題

2017 年の久里浜医療センターの調査結果から、自己改善している人が多数存在すると考えられます。自己解決を否定する対策の「ズレ」により、深刻なケースばかりが依存問題を抱える人の典型のごとく周知され、社会の誤解と偏見を増長しているように思います。

一般財団法人ワンネスグループ　横浜オフィス

利用者･対象者/対応の特徴

【利用者・対象者】

ギャンブル依存症のほか、インターネット・ゲーム依存症の相談を受けています。利用者は、主に 20～30 代です。

【対応の特徴】

全国各地にオフィスがありますが、横浜は通所のみ自主運営しています。関西では公立学校への講演、勉強会などを行っています。「週末通所コース」「個別カウンセリング」「ＳＮＳサポート・メッセージ配信」のほか、「家族プログラム」「家族面談」「支援者向け勉強会」を定期的に開催しています。金銭管理はもともと解決策ではありませんが、対応方法について、一緒に考えています。薬物事例の場合は、関西圏のオフィスに紹介しています。

ＯＢ・ＯＧ会はありませんが、就労者用、ミーティング参加者用、通所者用のオンラインによる個別カウンセリング、家族向けプログラム等があり、通常は有料ですが、終了後のアフターフォローとして、６か月間無料で提供しています。

神奈川県精神保健福祉センターの相談窓口、社会福祉協議会、支援者向けセミナー参加者からの紹介を受けています。触法ケースもあり、情状証人としての依頼も受けています。複数の弁護士との連携のほか、自助グループ、医療機関、民間のカウンセラーを紹介することがあります。

スタッフは自助グループへ参加するほか、ワンネスグループが独自で健康を高めるスタッフ向けワークショップを提供しています。

目指しているもの

依存症の速やかな回復と再発予防によって、社会復帰し、安心して新たな人生を歩めるよう、こころの奥底にアプローチし、全く新しい自分を生きられるよう支援します。

医療からこぼれる人も施設につながることで、回復への一歩を踏み出せるようにと考えています。

運営にあたっての課題

「週末通所コース」を設定していますが、もともと施設につながるころには重症化している場合が少なくないため、回復率は入所の方が高いです。

小中高生に対してのリファー先がないのが課題です。ゲームだけの問題ではなく愛着や関わり方の話をしますがピンとこない親が多いように思います。

民間団体は行政ができることに対して補完的な部分と考えています。回復のための社会資源の選択肢を提示できるよう、各施設の利用料や回復プログラムなど一覧できるものがあるとよいと思います。